

ホータンにおける医療多元主義

調査日程：2006年8月10日—8月23日。調査地：新疆ウイグル自治区ホータン

今回も、ホータンへの飛行は深夜と便利が悪い。中国の航空業界は空軍優先となっているからどうしようもない。また、いつものホータン賓館は共産党の会議があるとかで、その間、別のホテルに泊まることになり、疲れることから始まった。

だが、今回の通訳はウイグル医学をよく知っていて、調査の方向に最適な人であった。病気は人間にとって身近で、厄介な災いであり、それをいかに取り除くかはいつでも大きな問題である。ウイグル社会にはウイグル医学を始め、西洋医学、中医学、伝統的な治療儀礼、マザールへの祈り、などさまざまな病気を治す手段がある。ウイグル人はそれらをどのように考え、選択し、使ってきたのだろうか。改革開放の時代になり、経済的には豊かになってきたが、社会の大きな変化はウイグルの隅々まで影響を与えている。ある意味では不安な時代に、マザールなどの信仰は盛んになり、病気など災いについての人々の関心は高まっている。

【イマーム・アシム・マザール】

ホータン市から近い。途中で車を降り、砂漠をしばらく歩くと見えてくる。きれいな砂だから、通訳さんは裸足で歩こうとするが、やはり砂は熱い。この熱い砂はウイグル医学でも、身体に良いといわれ、手足を砂に埋めると、痛みが取れる。このマザールは最盛期には7000の人が訪れる、トイレ、沐浴室、食事用の大鍋など用意も整っている。マザールの木陰に30人くらいの人が休んでいる。女性が多い、ヤルカンドなどからホータン市内のウイグル医学病院に来たついでに、ここに病気直しのお参りに来た人も多い。

砂漠は意外と静かである。吹く風の音だけで、この静けさに身を委ねるのもよい。

(写真1：マザール遠望) (写真2：カラカシュのアプタール・マザール、女性が多い) (写真3と4：隣接するモスクで行われていた葬式)





【コクマルム・マザール】

平坦なホータン・オアシスのなかで、南西部にあり、カラカシュ河に面した小高い丘を成しているコクマルムはその眺望がすばらしい。今回も行くことにしたのだが、途中で多くの馬車、車が同じ方向に向かい、だんだん混んできて、ついには交通規制につかまった。別の道を行くと、夏の木曜日はここの

お祭りだということで、多くの人が参拝に訪れ、ザカート〈喜捨〉を求める人が列をなしている。洞窟は入るのを待つひとが殺到し、動きが取れない。ライカ郷の方に降りていくと、ダワズ（綱渡り）、ブランコ、手動式の回転ブランコ、また、チェリシュ（相撲というよりレスリングに似ている）などにぎやかに行われていた。

（写真5：飴玉を売っているが、これは1円で30個、ザカートとしてマザールの周りに座っている人に与える。もらった人はそれを集めて、引き取ってもらいお金に換える。この飴玉は貨幣と同じ交換価値しかない。）

（写真6：ウイグルの格闘技、チェリシュ、村対抗としても行われる）（写真7：ダワズ、正確には綱ではなく、ワイヤ）



【ウイグル医学】

今回はウイグル医学を他の医療体系との関連で考えることに重点を置き、ウイグル医学高等専門学校、付属病院、個人病院、医薬店などのほかに西欧医学の病院、伝統的な治療儀礼などの聞き取り調査を行った。新築された立派な病院だが、内部は閑散としている。ウイグル医学は漢方のように薬での治療を主とするから、近代医学独特の医療機器がないためであろうか。ベッドの患者と付き添いの家族がいるだけである。中国そしてウイグルでも完全看護は行われていない。そのため、入院患者の食事など身の回りのことは家族が世話する必要がある。看護師も多くはない。

中医学に関しては以前から「中西結合」が言われているが、ウイグル医学についても、その治療的効果を近代医学的に検証することが多くなり、近代医学への依存はとまらない。ウイグル医学専門学校の学生、スタッフ

は日本など外国の医学部に留学し、近代医学を学んでいる。だが、昔から個人医院を開いている人はそれに抵抗している。

(写真8：ウイグル医個人病院、看板なしでも多くの人が訪れる) (写真9：ユルンカシュのバザールの昔ながらの医薬販売、セキサンハルタ=八十袋屋と呼ばれる。)



中国の医療制度は改革開放、資本主義化の影響を強く受け、ホータンでも民間病院が増え、医療費が高くなるなど混乱している。その中で安価で、副作用もないウイグル医薬の人気の高まっている。旧市街には新装された多くの医薬店が軒を並べている。



(写真10：ホータン市内のウイグル医薬店)